



【研究ノート】オンライン日仏タンデム（語学交換）の制度設計について：神戸大学における実践例をもとに

廣田，大地

(Citation)

神戸大学国際コミュニケーションセンター論集, 18:37-46

(Issue Date)

2022-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013096>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013096>



【研究ノート】

オンライン日仏タンデム(語学交換)の制度設計について

—神戸大学における実践例をもとに—

廣田 大地

神戸大学 大学教育推進機構 国際コミュニケーションセンター

A design of online Japanese-French tandem (language exchange) -A practical example from at Kobe University

HIROTA, Daichi

Kobe University, IPHE, SOLAC

概要

本稿では, Zoomなどのインターネット会議システムを利用したオンラインでの日本語・フランス語間のタンデム(語学交換)活動を, 大学生を対象として継続的に実施するために, 具体的な実施体系をどのように設計すれば持続可能性が高いのかを考察する。2021年9月以降に複数回に分けてタンデム活動を実施し, 本論の筆者がコーディネーターを務める中で経験した問題点を分析するとともに, 参加学生の報告書を読み解くことで, 定期的なタンデム活動を無理なく継続していくための制度設計を探索し, また今後の課題を明らかにする。

キーワード

フランス語教育, タンデム, オンライン, 国際交流, 語学交換

1. はじめに

1.1 「タンデム」について

「タンデム」(tandem)という言葉は, おもにドイツ語圏, あるいはドイツ語教育の分野で用いられてきたものであり, 異なる言語を母語とする者同士でお互いの外国語学習をサポートしあう相互扶助的な活動を指すものである。その中でも, インターネットを介したオンラインでのタンデム活動のことを「e-Tandem」(あるいはフランス語で「Télé-Tandem」)と呼び, 近年関心が高まっている。これまでは, フランス語圏, あるいはフランス語教育の分野において, 「エションジュ」(échange

linguistique)という表現が一般的であったが、近年「タンデム」という用語も次第に認知されるようになってきており、たとえば、新ソルボンヌ＝パリ第3大学のWEBサイトではTélé-Tandemの参加者募集がおこなわれている(<http://www.univ-paris3.fr/accueil-projet-pedagogique-tele-tandem-sorbonne-nouvelle-2021-2022-247557.kjsp>, 2022年2月23日閲覧)。そこで、これまでのドイツ語教育における先行研究と今回の実践例の関連性を探り、また日本におけるドイツ語教育・フランス語教育間での議論を容易にするためにも、本研究では「タンデム」という用語を用いることとする。

1.2 フランス語教育におけるオンライン・タンデムの必要性

神戸大学におけるフランス語教育において、これまでもタンデムに類する活動は様々なかたちで実践されてきた。主な活動として、フランス語圏の大学から神戸大学に來ているフランス語母語話者の留学生に参加してもらい、フランス語を学習している神戸大学生との間で、定期的な交流会を開催し、お互いに日本語・フランス語を教え合うという活動が、この10年ほどの間に、教員である筆者も協力しつつ、一部の学生によって何度か自主的におこなわれてきた。

しかしながら、2019年度末以降、コロナ禍による影響により、そもそも学内において二人の人間が顔を突き合わせて会話するという行為そのものが困難になり、また、神戸大学生が交換留学や短期海外研修によりフランス語圏に赴くことも、フランス語圏から神戸大学に交換留学でやってくることも不可能となり、フランス語学習者がフランス語母語話者と交流する機会がほとんど皆無になってしまうこととなった。

そのような状況において、海外の大学で日本語を学習しているフランス語母語話者と神戸大学でフランス語を学習している日本語母語話者との間で、オンラインによるタンデム活動を実施することができれば、双方のニーズに応えることができると予測された。また、通常の日仏交流が困難になってしまっている状況であるだけに、日仏双方の参加者が通常よりも高いモチベーションでタンデム活動に臨んでくれることが期待された。

また、2020年度以降、Zoomなどのオンライン会議システムを活用したリアルタイム形式の遠隔授業が外国語科目において主流となったため、参加対象となるような大学生が、タンデムをおこなう上で、Zoomなどのツールの使用に習熟していることも、オンラインによるタンデム活動の実施を容易にしてくれると考えられた。

2. 先行研究

2.1 国内の大学における実践例

2021年度後期から、筆者が所属する神戸大学において担当している2年生向けの選択フランス語科目とも関連付けて、タンデム活動を本格的に運営していくことを目指し、タンデムの具体的な実施体系を構築するためにも、まずはこれまで日本の大学で外国語教育に関連付けて実施されてきたタンデム活動に関する調査をおこなった。

日本国内の教育機関におけるタンデム活動は、小林(2016)によっても詳しくまとめられて

いるが、主なものとして、大阪大学 (<https://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/international/tandem>) と九州大学 (<https://isc.kyushu-u.ac.jp/center/tandem/index.html>) における活動をあげることができる。どちらも異なる言語を母語とする者同士がペアになり、お互いの外国語学習を母語話者の観点からサポートする一般的なタンデムの形式を採っている。脇坂(2012)などでも紹介されているように、1回のタンデム学習の時間は1時間とし、その内30分ずつをそれぞれの外国語学習の時間に当てることが多いようである。また、場合によっては、1時間の学習時間の前後に、次のタンデム学習のテーマや日時を相談する時間がとられることもある。また、脇坂(2013)によって紹介されていた Skype などのツールを用いたオンライン・リアルタイム形式のタンデム (e-Tandem) は、2010年代にはそれほど活発におこなわれていなかったが、2020年度以降、コロナ禍の影響もあり、小西(2021)をはじめとして日本の様々な教育機関で実験的な実施がされているようである。

2.2 ドイツ語関連での実践例

上述の先行研究や実践例は、日本語教育や英語教育の関係者によっておこなわれているものが中心であったが、本稿では日本の大学における第二外国語としてのフランス語教育のためにタンデム学習を活用する方法を検討するものである。そのため、同じく大学での第二外国語教育における実践例として、神戸大学においてドイツ語教員によって実践された2点の代表的な取り組みを紹介することとする。

まず、1点目は、林良子・杉原早紀・Trummer-Fukada, Stefan (2013)による活動である。2012年度後期に、神戸大学の協定校であるハンブルク大学の日本語学科履修生32名と、神戸大学のドイツ語Sクラス履修生24名との間で実施されたこの活動では、授業の時間内にタンデム活動を実施するというスタイルがとられている。週1回の授業において、日本時間で18時から30分間の間、隔週で日本語あるいはドイツ語のみでの会話を、1対1あるいは1対複数人のグループで、Skype を使い行うものであった。課題の一つとして、欠席者がいた場合にタンデムのペアまたはグループを編成する必要があったという点が挙げられている。

2点目として、マルコ・シュルツェ氏(当時:神戸大学 大学教育推進機構 特任講師)による2020年度の活動を挙げることができる。特筆するに値する重要な実践例であると評価できるものの、この活動については、論文・研究ノートなどの研究内容の記録が残されていないため、シュルツェ氏から提出された会議資料を元に、ここで簡潔にまとめておきたい。この活動では、神戸大学の協定校であるトーリア大学、ハンブルク大学、グラーツ大学における日本語学習者と、神戸大学に所属するドイツ語学習者の間で10組以上のタンデム・ペアが成立し、その他にもドイツ語で「シュタムティッシュ」というグループでのフリートークの場が毎週開催されていたとのことである。大規模かつ非常に充実した活動になったようであるが、タンデムのペアが成立した後、そのペアが具体的にどのような活動を定期的に行っていたのかが十分に把握されていなかったため、実際のタンデム活動そのものの有

効性や課題点を検証することができなかった点が指摘できる。

上記の2例は、対照的な性質にあり、林良子・杉原早紀・Trummer-Fukada, Stefan による2012年度の活動は、学生によるタンデム活動を授業時間内に実施させることで教員による管理・指導がおこないやすい状態にある。シュルツェによる2020年度の活動では、その反対に、タンデム活動そのものについて教員は関わらず、教員の役割はむしろタンデム・ペアを成立するまでのペアリング作業が中心となっている。

前者のタイプの活動における問題点は、タンデムを実施する際に、授業時間の制限が足かせとなるという点である。まず、タンデムをクラス単位で実施してくれる相手先のクラスを確保することが容易ではなく、日本人側にとっても、その授業を履修できない学生がタンデム活動に加わることができないという問題がある。また、欠席者に対する対応も課題となる。

後者のタイプの活動は、タンデム活動についての制約がないため、それぞれのタンデム・ペアが自由に自分たちのタンデムを実施できるというメリットがあるが、教員による管理がおこなわれていない場合、実際どのような活動がおこなわれていたかは不明となってしまう。また、万が一タンデム・ペア間でトラブルが生じた場合にも、教員などの第三者が介入することが困難な点も課題となるだろう。

3. タンデム・プロジェクトの試験的实施

3.1 タンデム参加者の確保に関して

以上のような先行する実践例における課題点を踏まえ、2021年10月からの本格的な運用を開始する前に、まずは2021年9月の1か月間において、少人数での試験的な運用を試みることとした。参加者として、日本人学生3名、フランス人学生3名を確保し、日仏1対1のペア3組を編成し、1か月の間、週1回のタンデム活動を各ペアに自主的に実施してもらった。日本人学生の参加者は、フランス語を1年半以上学習している学部生3名で、本活動に強い関心を示した学生に参加協力を依頼した(J1・J2・J3とする)。フランス人学生の確保のためには、フランス語圏の大学からの留学生を国際交流課に調査していただき、該当する学生10名にこちらからのメールを転送していただいた。その結果、3名から返事があり、1名は日本で生活している大学院生(F1とする)、あとの2名は、本来であれば交換留学生として来日する予定であったがコロナ禍の影響によりフランスに留まり、特別聴講学生としてオンラインで授業に参加している大学生2名(F2・F3とする)である。日本語母語話者の学生には補佐員として研究に協力してもらい、タンデムの実施に加えて、毎回の報告書作成や今後のタンデム運営方針についてのブレインストーミング的な議論にも参加してもらった。

3.2 タンデム実施に関する基本的規則の確定

タンデム学習を試験的に開始するにあたり、これまでの先行研究や実践例を参考にして、次の表1のような基本的規則を確定し、参加者への周知をおこなった。

表1 タンデム実施に関する基本的規則

- | |
|---|
| ・週1回のタンデム学習時間以外に個人的な交流はおこなわない。(次回のタンデム学習に関するメールでの相談を除く。) |
| ・1回のタンデムは、日本語30分・フランス語30分に分けておこない、使用言語の順番については、後半に発展的なテーマを話すことを踏まえて各ペアで決めておく。 |
| ・毎回のタンデム学習は録画し、報告書を作成する。 |

実際の会話の中身や細かな進行方法についてはタンデムの参加者に完全に委ねるが、上記のような最低限のルールを決めることで、「週1回、日仏それぞれ30分間」のタンデム学習という条件を本タンデム活動の参加者全員で共有することにより、この条件が活動を継続していく上で妥当なものであるかどうかを検討することができるだろう。そのためにも、毎週のタンデム学習後に報告書を提出することも参加者の義務とした。

タンデム学習は基本的に1対1での会話を中心に進めていくことになるが、双方向のやりとりの度合いにより会話の形態を、次の表2に記した3つに区分することができるだろう。

表2 タンデム学習において想定される3つの会話形態

- | |
|-----------------------------------|
| ①自分が調べた内容を聞いてもらう(発表形式) |
| ②ニュース記事や興味のある作品についてインタビュー形式で聞いてみる |
| ③ディスカッション形式 |

本タンデム・プロジェクトにおける参加者は、日仏どちらも今回のようなオンライン・タンデム学習が初めての経験であり、1時間のタンデム学習時間を有意義に使えるように、日本人母語話者側には、3つの会話形態のうち、①と②を組み合わせるように助言した。具体的には、毎回のタンデム学習までにPowerPointなどで発表資料をつくり、その内容に関連した質問事項も用意しておくことを提案した。③のディスカッション形式であれば、このような準備作業はあまり必要ではないが、学習言語であるフランス語の会話能力がそれほど高くなく、またタンデム学習の経験が乏しい状況においては、ある程度、事前準備に時間をかける必要があるだろう。

3.3 試験的タンデムを実施した結果

上述の3組のペアには、2021年9月の間、週に1回、合計4回のオンライン・タンデム活動を実施してもらった。次の表1にまとめた通り、「J1×F1」ペアの第4回目を除き、どのペアも毎週同じ時間帯に定期的にタンデムを実施することができたようである。

表3 試験的タンデムの実施日時

ペア	タンデム実施日時
J1×F1	9/2(木)10h00, 9/9(木)10h30, 9/16(木)11h00, 9/22(水)9h00

J2×F2	9/6(月)20h00, 9/13(月)20h00, 9/20(月)20h00, 9/27(月)20h00
J3×F3	9/2(木)17h00, 9/9(木)17h00, 9/16(木)17h00, 9/23(木)17h00

試験的タンデムを実施している2021年9月の間、日本語母語話者の参加者3名とともに週1回、定期的なミーティングを実施し、報告書の内容を確認するとともに、今後のタンデム活動のルールを再検討した。その結果、当初はタンデム学習の様子をビデオ録画したものをデータ提出してもらうことを計画していたが、自分が映っている録画データを他の人に見られることに抵抗を感じる者が多く、また報告書だけでも十分に毎回のタンデム学習が順調に進捗していることを確認できたため、録画データは提出しないことに変更した。ただし、タンデム学習中にハラスメントなどの問題が生じた場合の対策として、また参加者が復習に活用できるよう、毎回のタンデム学習の様子を日本語母語話者側が録画して、各自で保管しておいてもらうこととした。

4. タンデム・プロジェクトの実施（第1期）

4.1 タンデムを実施する上での制度設計

以上のような試験的なタンデム活動をおこなった上で、2022年10月からは、筆者が担当している2年生向けのフランス語選択授業と関連付けて、参加者をさらに増やして、タンデム活動の拡大版を実施することとした。その際、授業履修者全員がタンデム活動に参加することを希望し、授業外の時間に自主的にタンデム学習を毎週おこなうことを希望していることを確認した。

日本語母語話者の参加者は、試験的实施期間から参加している3名に加えて5名が参加し、次の表4の通り、合計8名となった。ただし、授業履修者は5名のみで、あとの3名はすでに同一科目を履修済みなどの理由で履修ができないため、特別に聴講生として参加してもらった。

表4 日本語母語話者の参加者

略称	性別	在住地	身分
J1	女性	日本	文系4回生
J2	女性	日本	文系2回生
J3	女性	日本	文系2回生
J4	女性	日本	文系2回生
J5	女性	日本	理系2回生
J6	男性	日本	理系2回生
J7	男性	日本	理系1回生
J8	女性	日本	文系4回生

それに対して、フランス語母語話者の参加者は、試験的实施期間から参加している3名に加えて、すでに参加しているフランス語母語話者から知り合いの日本語学習者(F4・F5 とする)を紹介してもらい、合計5名の参加となった。また、F3からは2022年1月以降の第2期においても、さ

らにもう1名の参加者(F6とする)を紹介してもらっており、最終的には6名の参加者を得た。

フランス語母語話者が参加者5名であるのに対して、日本語母語話者の参加者が8名であるため、1対1のペア以外にも、日仏で2対1と3対1のグループを1組ずつ作ることで人数調整をおこなった。その際、J1・J2・J3は試験的なタンデム運用ですでにある程度の経験を得ており、1対1でのタンデム学習に問題ないと考えられる一方、J3・J5・J6・J7にとっては初めての試みであり、フランス語の会話能力もJ1・J2・J3と比較するとそれほど高くないため、日本語母語話者が複数名のグループに配置した。J8もタンデム学習は初めてであったが、すでに4回生でフランス語学習歴が長いこと、また2022年1月からフランス語圏への留学を予定しており、ちょうど留学先の大学に所属しているフランス語母語話者F4がタンデム活動に参加することになったため、J8とF6については1対1のペアを編成した。

4.2 タンデムを実施した結果と考察

第1期のタンデム活動は10月初めから12月末まで実施され、どのグループも次の表5のように、ほぼ毎週定期的にタンデム学習を実施することができた。グループによっては、何回か不開催の週もあるが、体調不良、あるいは定期試験や論文発表などの専門の学業によるやむを得ない事情のものであった。

表5 タンデムの組み合わせと実施日時(第1期)

組み合わせ	タンデム実施日時
J1×F1	10/7(木)9h30, 10/14(木)9h30, 10/21(木)9h30, 11/11(木)11h00, 11/17(水)10h00, 11/25(木)10h00, 12/23(木)10h00
J2×F5	10/18(月)18h00, 10/25(月)18h00, 11/1(月)18h00, 11/8(月)18h00, 11/15(月)18h00, 11/22(月)18h00, 12/3(金)19h00, 12/8(月)18h00, 12/20(土)18h00
J3・J6・J7 ×F2	10/15(金)19h00, 10/22(金)19h00, 10/29(金)19h00, 11/5(金)19h00, 11/12(金)19h00, 11/19(金)19h00, 11/26(金)18h00, 12/3(金)18h00, 12/17(金)18h00
J4・J5 ×F3	10/21(木)19h00, 10/28(木)19h00, 11/4(木)19h00, 11/11(木)17h00, 11/18(木)18h30, 11/25(木)18h00, 12/2(木)18h00, 12/16(木)22h00, 12/23(木)18h00, 12/30(木)22h00
J8×F4	10/22(金)17h00, 10/30(土)17h00, 11/6(土)18h00, 11/13(土)18h00, 11/21(日)18h00, 11/28(日)18h00, 12/15(水)22h00

日本語母語話者が複数名で構成される2グループ(J3・J6・J7×F2, J4・J5×F3)では、日仏間でのバランスの悪さにより、日仏双方から不満が出るのではないかと危惧していたが、複数名で参加することにより、ひとりひとりの事前の準備時間やタンデム学習時の負担が軽減されることも

あり、実際には否定的な意見はほとんど見られなかった。その逆に、積極的にフランス語で発言しようとしている他の日本語母語話者と一緒に参加することで、どのような表現を用いればよいかを学習する機会にもなり、またモチベーションの高い学生とともに参加することで自分も学習意欲を高めるといった相乗効果も見られたため、場合によっては複数人でのタンデム学習にもメリットがあるように感じられた。ただし、その際にペアを組んだフランス語母語話者の日本語会話能力がかなり高く、日常会話レベルであれば困難なく会話を続けられるほどであったことも、日仏で複数人对1人の組み合わせでも問題なくタンデム学習を進めることができた大きな要因であるように思われる。

5. タンデム・プロジェクトの実施(第2期)

5.1 タンデム・ペア(グループ)を変更する理由

2022年1月からは、J8がフランスへ留学に出発し、F3が専門の授業の影響で忙しくなったため、タンデム活動に参加できなくなり、タンデムの組み合わせを変更する必要が生じた。また、日仏のタンデム参加者にも、相手の話をじっくり聞きたいタイプの者と、自分の話をたくさん話したいタイプの者とがあり、それぞれの参加者にはできるかぎり多様なタイプの人とタンデム活動をおこない様々な経験を身に付けてほしいという理由もあり、再度メンバーの組み合わせを変更して、2022年1月から3月にかけて新たに第2期のタンデム活動を実施し直すこととした。

5.2 タンデムを実施した結果と考察

論文作成時の2022年2月27日時点で報告書が提出されたタンデム学習は、以下の表6のようになっている。

表6 タンデムの組み合わせと実施日時(第2期)

組み合わせ	タンデム実施日時
J1・J5×F4	1/22(土)21h00, 1/29(土)21h00, 2/6(日)21h00, 2/14(月)21h00
J2×F2	1/21(金)20h30, 2/6(日)22h00
J3×F1	1/13(木)18h00, 1/20(木)10h00, 1/27(木)10h00
J4×F6	1/28(金)19h30, 2/3(木)18h00, 2/10(木)18h00, 2/17(木)18h00
J7×F5	1/18(火)18h00, 2/4(金)18h00

第1期とは異なり、第2期では2月初めで大学の授業が終了しており、毎週のミーティング時間が確保できないため、報告書の提出が滞っている参加者がでてきた。もしくは、期末試験・期末レポートの対応に追われて、タンデム学習を実施できていない参加者がいることも考えられる。また、休業期間中には授業以外の様々な活動に取り組んでいる学生も多く、単純にモチベーションが低下してしまったというよりも、他の活動と並行してタンデム学習を続けることが難しくなっている学生もいるのではないかと想像される。

6. まとめ

本稿では、まず表1にあげたように、タンデム運営のための基本的なルールを暫定的に策定した。タンデム学習以外にペア同士で交流しないというルールは、ペア同士がお互いにほどよい距離感を保って長期的にタンデムを継続していく上でも適切なルールであると考えられる。

週1回60分間で日仏それぞれ30分ずつ時間を取るというルールも、参加者の多くに受け入れられ、ちょうどよい時間配分であるという反応を得ている。その時々によって、もっと長い時間、あるいはもっと短い時間のほうが望ましいと感じる参加者もいたが、長期的に双方が負担に感じすぎない範囲でタンデム学習を継続するためにも、この時間配分が適切であると考えられる。

また、毎回のタンデム学習をビデオ録画し、報告書を作成するというルールに関しても、あとで録画を見直して、タンデム学習中に聴きとれなかった単語を確認するなど、自律学習において効果を挙げている。また、報告書に自分が学習した単語・熟語を記載することで、学習内容の復習にもつながっている。コーディネーターとしては、タンデム学習がビデオ録画されていることにより、万が一参加者同士の間でトラブルが発生した際に、その事情を把握するためにも、タンデム学習の録画データが保存されていることは、活動を継続していくうえでの不安を減らす効果がある。また、報告書の提出により、各参加者の状態や要望などを把握することは、タンデム活動を継続し、その内容をより良いものに改善していくためには不可欠な要素であると考えられる。

参加者との定期的なミーティングの実施について考察すると、学生補佐員として雇用し、勤務としてミーティングを開催する、または授業と関連付けて、授業時間の一部を使って口頭での報告をしてもらうという2つの方法であれば、どちらも運用上の問題もなく、タンデム参加者間での情報共有や意見交換も活発におこなわれ、なんらかの疑問や問題が生じた場合もコーディネーターである筆者と相談することができて有益であった。しかしながら、第2期のように学生が休暇期間に入り定期的なミーティングが開催されなくなった場合、毎週のタンデム学習が実施されなくなる、あるいはタンデム学習は実施されていても、報告書の提出が滞り、コーディネーターが現状を把握できなくなるという問題が生じている。今後、参加者数をさらに拡大していく上で、参加者全員を学生補佐員として雇用する、あるいは授業に参加してもらうことは現実的に不可能であり、それ以外の方法で、各参加者のタンデム活動を正確に把握し続ける方法を確立することが急務となっている。

最後に、タンデム活動の実施期間について検討しておく、今年度は、9月(試験的運用期間)、10～12月(第1期)、1～3月(第2期)と同一ペアでのタンデム活動期間を区切り、何度かタンデム学習のペア・グループの変更をおこなったが、今後、参加者の人数を増やしていくことを考慮すると、コーディネーターの労力が大きくなり、すべてのタンデムペアの状況を把握しつつ、最良の組み合わせを検討することが困難になってくるだろう。今回も、ペアによっては順調に学習をおこなえているためペアを変更して欲しくないという要望が、日仏どちらからも幾つか挙がっていたことを踏まえると、あまり短期間でペアを変更してしまうことはモチベーションの維持において負の要因となる可能性が否めない。日仏それぞれの大学の学事暦や休暇期間を考慮すると、10月(あるいは9月半ば)から12月末までの期間と、4月(あるいは3月半ば)から6月末までの期間による、年2回に分けたタンデム活動の実施が現実的な制度設計であると考えられる。1～3月と7～9月におい

でタンデム活動を実施できないのは残念ではあるが、大学教員がコーディネーターを務める活動としては、休暇期間中の学生の活動をコントロールすることは不可能であり、その期間は、日仏タンデム学習のペア双方が希望した場合のみ、自主的に活動を継続してもらうという対応をとらざるを得ないだろう。次の図1は、そのようなタンデム活動の実施期間を図式化したものである。

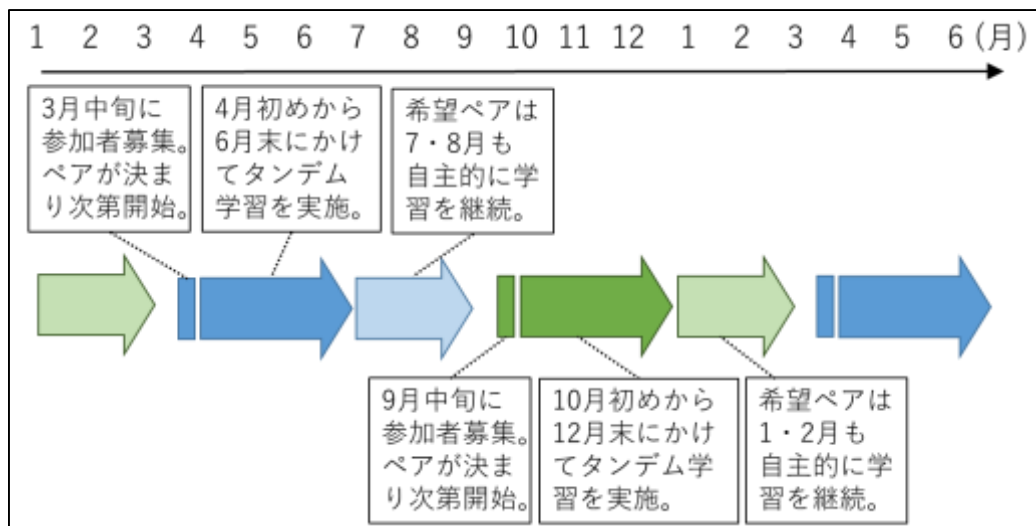


図1 継続可能性が高いタンデム活動の実施期間

以上のように、今後タンデム活動を継続していく上で、さらに検討しなければならない事項も幾つかあるが、参加者からは日仏ともに有意義な活動であるとの肯定的な声が多く、モチベーションの高い学生を対象とした授業外の活動の一つとして、とりわけ留学準備のためのプログラムの一環として、オンライン・タンデム活動を今後も継続していくことは重要であると考えられる。

引用文献

- 小西正恵(2021).「ビデオチャットでのイータンデム・オンライン国際交流におけるコミュニケーションのための協働」『外国語教育メディア学会機関誌』58(0), 43-67.
- 小林浩明(2016).「タンデム学習の意義と可能性」『北九州市立大学国際論集』14, 135-145
- 林良子・杉原早紀・Trummer-Fukada, Stefan(2013).「スカイプを利用した日本語・ドイツ語遠隔タンデム授業の実践」『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』41, 44-54.
- 脇坂真彩子(2012).「対面式タンデム学習の互惠性が学習者オートノミーを高めるプロセス：日本語学習者と英語学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』24, 75-102.
- 脇坂真彩子(2013).「E タンデムにおいてドイツ人日本語学習者の動機を変化させた要因」『阪大日本語研究』25, 105-135.